

KAPAL 第 6 回研究大会 特別企画

「インドネシアに生きた賀集由美子さんとバティック —チレボンでの軌跡と現在、これから—」

特別企画の開催にあたって

KAPAL ウェブサイトのトップ画面を開くと、魚や蛸、鯨、亀などが泳ぐ青い海に、船が行き交うにぎやかなバティックのデザインが目に入ります。そのバティックの海で鯨の背に乗り、楽しそう船をこぐペンギンたちは、インドネシア、日本の双方に多くのファンをもつペン子ちゃんという名で知られています。

ペン子ちゃんはこのバティックの制作者である故賀集由美子さんが生み出したキャラクターです。1990 年代にジャワ北海岸の港町チレボンに移住し、バンドン工科大学芸術学部修士課程を修了後、2000 年代初頭に自宅兼工房としてスタジオ・パチェを開いた賀集さんは、伴侶の華人系インドネシア人コマール氏とともに、多くの職人に囲まれてバティック制作を行ってきました。繊細なモチーフを独自の色合いで染め上げる手書きバティックをはじめ、日本人もインドネシア人もその可愛さに目を細めるペン子ちゃん柄のユニークなバティックや小物など、数多くの作品を残しています。2018 年の KAPAL 発足にあたり、そのペン子ちゃんバティックのサイトへの掲載にも快く応じていただきました。

その賀集さんが 2021 年 6 月に新型コロナ感染症により急逝されてから約 3 年半が経ちました。突然の訃報に多くの方が茫然とされ、哀しみに暮れました。職人さんで賑わった工房がどうなったのかと心配されている方も多いかと思います。しかしこの間、ご友人や有志の方々、またバティック制作に協力されていたインドネシアの関係者のみなさんが、賀集さんが残してきたものを振り返り、時代にあった新しい形のバティックを模索しながらその意志を引き継ごうと、着実に歩みを進めています。

今回は通常の研究報告とは趣向が異なりますが、日本とインドネシアで多くの人々に愛され、少なからぬ KAPAL 会員もお世話になった賀集さんを偲び、チレボンで追及されたバティック制作の軌跡や、インドネシアのバティック業界とともに変化していった作品の変遷、工房の運営を振り返り、さらに現在、どのようなことが進められているのかを、賀集さんと長く親交を深められたインドネシア在住のお二人からオンラインを通じてお話いただきます。同時に会場では、代表作ともいえる超大型の生命樹のバティックをはじめ、

実際の作品を展示します。チレボンのバティック産地トゥルスミとも中継でつなぎ、賀集さんに所縁のある方々にご登場いただくことも計画しています（通信状況が悪かったらご容赦ください）。

この特別企画を通じて、KAPAL ウェブサイトの裏側にある賀集さんとインドネシアとのつながり、バティックへの思い、チレボンの人々との交流の軌跡を、参加者のみなさんと共有できればと願っています。

工藤裕子

プログラム

1. 趣旨説明：工藤裕子

2. 登壇者によるトーク：

池田華子（クロスカルチャー・オンラインメディア「+62」編集長）

さかきばらしげみ（染織家・インドネシア国立芸術大学教員）

両氏より、賀集由美子さんプロフィール、バティック制作の変遷とその特色、スタジオ・パチェについて、などを賀集さんの生前の動画も交えながら語っていただきます。

会場では随時、実際の作品を展示します。

3. フリートーク・質疑応答

会場展示協力：

加治屋聡恵・青柳寿美子・吉岡里奈・吉岡隼人・吉岡冬馬